C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART
vol.75

Topics

開館20周年記念 没後20年 ルーシー・リー展

所蔵作品展 辰野登恵子がいた時代

開館20周年記念展 唐画もん—武禅(ぶぜん)に閬苑(ろうえん)、若冲も

所蔵作品展 田中一村と東山魁夷ー千葉ゆかりの画家たち、それぞれの道ー

《線文大鉢》1958年頃 イセ文化基金 Estate of the artist 撮影：大屋孝雄

館長のつれづれだより ～ドラッカー教授に学ぶ美術館の経営～

主題や構想が二転三転して何時までも書き出せないまま、締め切りが過ぎようとする原稿をかかえて、東京・六本木にあるサントリー美術棺で開催される「藤田美術館の至宝　国宝 曜変天目茶碗と日本の美」の内覧会に、4日の午後、行ってきました。気分の転換を図り、小誌エッセイのために何か良いアイデアでも浮かばないかと思いつつのことです。

大阪にある藤田美術館は、明治時代に活躍した大阪の実業家・藤田傳三郎氏(1841-1912)父子の築いた、仏教美術やいわゆるお茶道具を中心とする一大美術コレクションを基にして、昭和29(1954)年に創設開館した公益財団法人(現在)の美術館です。

藤田氏は、明治維新ののち、神道国教化政策に基づいて行われた廃仏毀釈によって寺院は荒廃し、仏像、仏画、仏具などの仏教美術が破壊され、失われることを憂い、それらの救済(購入)に努めるなど文化財の保護に尽力しました。また、茶の湯に親しむ数寄者としての優れた鑑識眼によって数々の名品・逸品を蒐集しました。展覧会の表題になっている「国宝 曜変天目茶碗」は、その代表と言え、チラシのコピーにある通り「名品ずらり。めっちゃええやん！」と、展示を見た人は、関西人でなくとも思わ声を上げたくなってしまうでしょう。

衆知のように明治時代には、藤田氏のほかにも、益田孝(鈍翁)氏、原富太郎(三渓)氏、岩崎弥之助氏など、実業で身を起こし、大コレクションを形成した美術蒐集家・数寄者は少なくありません。明治・大正期にこうした大蒐集家が次々と輩出した背景には、政府主導による積極的な文化政策とでも呼ぶべきものがありました。

日本の近代化は、すなわち西欧に学び、西欧化することとされるなかで、外務卿(大臣)を務めた井上馨(世外)は、ヨーロッパ留学の経験から、近代化を目指す日本が、欧州列強と肩を並べるには、彼らのもつ歴史や文化と比べて、些かも引け劣らない質の高い文化を日本が待つことを内外に知らせるのが急務と考えました。

井上は、鹿鳴館を建てて、西欧文化の粋に触れる社交の場、つまり外国貴賓と上流社会の社交の場を提供するとともに、日本の古典文化の尊重を図り、自邸に明治天皇の行幸を得て、歌舞伎の公演を行い、一方、新興の富裕な実業家たちに呼びかけ、茶の湯を介して、日本に伝統的にある社交の場を再興しようとしました。これに応じた数寄茶人を自認する実業家たちは、自邸内に茶室を建て、茶会を催し、室町時代の東山山荘にみた「会所座敷の室礼(しつらい)」に倣って広い座敷を設け、そこには意を凝らして、所蔵する美術品を飾りました。それは現在の美術館の展示空間のようであり、井上による見事な民間活用による文化事業にほかならず、美術鑑賞の場の提供とその普及盛行の証といえましょう。同時に、放置しては滅びる恐れのあった文化財の保護の役割をも果しました。

しかし、今、社会環境の大きく変化する中で、一個人コレクターに対して、そうした美術作品の蒐集や鑑賞に、かつての近代数寄者たちに向けられたほどの多くの期待は望めないでしょう。それに代わるのが美術館、市民文化の普及向上の指標となり、社会教育や生涯学習の推進を標榜し、市民のための美術教育や鑑賞を担うのが美術館の役目でありましょう。

それが「市民のためのもの」であるならば、そこには「市民自らによる」という一語が加わって良いのではないかと、わたしは考えます。「自らによる」というのであれば、その享受なり恩恵に与るためには「その人に見合った相応の(例えば、善意による寄附・寄贈、ボランティアや友の会の活動を通しての)負担」もあってこそ、本当にその「楽しみの実感」があるのではと思うからなのです。

お蔭様で、先日、好評にうちに終了しました「ドラッカー・コレクション　珠玉の水墨画」では、「マネジメントの父」と親しみ敬われた博士蒐集の水墨画の素晴らしさを鑑賞者には十分に味わって頂けたと思っておりますが、と同時に、今回の展覧会開催の意図の一つでもあった人としてのドラッカー、愛して止まない日本美術から学んだことの反映としての博士の思想という面の幾許かも、展覧会を企画したスタッフの努力によって明らかにし得たのではないかと自負するところがあります。

博士は、マネジメントに関する多くの提言をし、多くの経営者たちに強い影響力があったことは自明です。そのドラッカー博士が、最後に取り組んだ仕事は、破綻しかけた美術館の再建であり、非営利団体の経営の問題でした。博士は言います。「補助金(税金等)だけに頼るのではなく、自ら経済的にも自立し、経営してゆくことこそ肝要」。そしてその実現のためには何を、如何になすべきかということでありました。この提言を受けて、わたしたちは、自立力をもつ千葉市美術館が、市民のため、市民とともに歩む美術館として、開館20周年を迎えるいま、新たな気持ちで、次の10年、20年、50年先を見据えながら精進してまいる所存です。一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申しあげます。

［館長　河合正朝］

千葉市美術館　外観

Lucie Rie
A Retrospective

千葉市美術館開館20周年記念　没後20年
# ルーシー・リー展
2015年7月7日(火)–8月30日(日)

《ピンク線文鉢》
1980年頃　個人蔵
Estate of the artist
撮影:上野則宏

ルーシー・リーといえば、5年前に六本木の国立新美術館で行われた回顧展を思い出される方もいるでしょう。この展覧会で初めて彼女の作品と出会い、心をつかまれたファンも少なくないと思います。「没後20年 ルーシー・リー展」は、先の回顧展の姉妹編に位置づけられ、1995年に亡くなったリーの没後20年を機にその仕事を振り返るものです。今年4月に笠間の茨城県陶芸美術館で始まり、千葉、姫路、郡山、静岡を巡回する予定です。今回ご覧いただく作品は、大半が日本で初公開となりますが、ここでは見どころをいくつかご紹介しましょう。

まず最初に、新発見されたリーの学生時代の作品3点が挙げられます。これは、オーストリア応用美術・現代美術館(MAK)の調査研究によって明らかになったもので、彼女の出身校であるウィーン工業美術学校からMAKに寄贈された一連の作品の中から発見されました。リーはウィーンに生まれて教育を受け、陶芸家としての評価を得ますが、オーストリアを併合したナチス・ドイツの迫害を逃れてイギリス・ロンドンに渡り、同地でその後の長い作陶生活を送ることになります。祖国への思いは複雑で、存命中にはウィーンでの個展開催を許しませんでした。没後、ようやく回顧展が開催され、近年研究が進められる中での新発見といえますが、今回出品されるのは、いずれもシンプルで色のはっきりとした作品です(図1)。同時代の装飾的な好みを考えると、リーの独創性が感じられるでしょう。

来場者はまず、展示室を入ってすぐにずらりと並んだ陶製のボタンに圧倒されるでしょう(図2)。ロンドンに工房を構えて落ち着いたリーですが、まもなくイギリスも戦争に加わります。戦中から戦後にかけて、望んだ作陶活動ができず生活のために作ったといわれるボタンは色もかたちも様々で、ボタンというよりアクセサリーにも見えます。これらのボタンはオートクチュール用に制作され、生地に合わせて一つ一つ色を調整したといわれています。ウィーン時代から釉薬実験に励み、得た知識をノートに書きためていたリーならではの技術が活かされているといえるでしょう。シンプルなかたちで色のバリエーションをもつものからユニークな造形まで、10の箱と11のシートに収められた宝石のようなボタンの数々を堪能していただきたいと思います。

前回の回顧展は日本でのルーシー・リー人気に火をつけ、多くの優品が国内のコレクターの手にも渡りました。従来の陶芸愛好家層とは異なる人々にもその熱狂は広がっていったといえます。今回の展覧会では、国内の所蔵者の方々からも多くご出品いただくことが叶いました。これらの作品を並べてみると、「日本人好みのルーシー・リー」といった傾向も見えてくるかもしれません。実際、日本でのルーシー・リー人気はイギリスに次ぐともいわれています。お借りした作品のなかには、茶道具などとして実際に使われたであろうものがいくつか見られました。リーの作品がこれほど日本で親しまれるのにはなぜでしょうか。日本に暮らす私たちには、生活空間のなかに陶芸作品(やきもの)を受け入れる素地があると考えられますが、加えて、彼女の作品のシンプルなかたちと絶妙な色彩感覚に共感する美意識があるのかもしれません。リーの作品には比較的大きなものもありますが、今回展示している作品の多くは、両手でちょうど支えられるサイズ・かたちのものです。うれしいことに、展示室に居ると「私はこれがいいわ。」「これすてきね。」といった声がちらほらと聴こえてきます。それぞれに心の中で手に取った感覚を楽しんで

(図1)《青紬鉢》1926年　オーストリア応用美術・現代美術館蔵
Estate of the artist　photo©MAK/Aslan Kudrnofsky

(図2)《陶製ボタン》1940年代　個人蔵　Estate of the artist　撮影:大屋孝雄

おられるのでしょうか。

　また、夏休み期間の開催ということもあり、会期中は会場で小中学生向けのクイズシートやセルフガイドを用意しています。「かたちともようで楽しむ」と題して、ルーシー・リー作品の特徴的なかたちと技法を見つけながら展示を楽しめるようになっています。会場ロビーで上映しているインタビュー映像では、アトリエでの制作の様子が見られます。リーの代表的な技法ともいえる掻き落としや、パーツごとに轆轤でひいたものを継ぎ合わせるやり方など、ああなるほどと思わせてくれます。何よりも、インタビュアーに答えるリーの表情・肉声から、日々轆轤でかたちをつくり釉薬を合わせ、焼き上がりの瞬間を楽しみに待つ一人の陶芸家のしなやかな姿勢が伝わってくるに違いありません。

［学芸員　山根佳奈］

《スパイラル文花器》
1980年頃　個人蔵
Estate of the artist
撮影：大屋孝雄

レストランかぼちゃわいん「没後20年 ルーシー・リー展」限定メニューのお知らせ

ルーシー・リーのおもてなしセット

ルーシー・リー手作りの
エピソードをもとに
チョコレートケーキを展
覧会限定でご用意。

680円（15:00～）

ルーシー・リー展 限定ランチセット

1680円
（11:00～15:00／1日10食限定）

千葉市美術館11階「レストランかぼちゃわいん」にて

営業時間：ランチ 11:00～15:00 ／ ティータイム 15:00～17:00 ／ ディナー 予約制　定休日：月曜日

関連イベント

■ 講演会（終了しました）
「ルーシー・リー・スタイルの形ができるまで」
講師：金子賢治（茨城県陶芸美術館長）
7月20日（月・祝）14:00より／11階講堂にて
「再現　ルーシー・リーの制作技法について」
講師：小山耕一（陶芸家）
7月26日（日）14:00より／11階講堂にて

■ ワークショップ（終了しました）
「オートクチュールのボタンをつくる」
8月2日（日）14:00より／11階講堂にて

■ 市民美術講座
「ルーシー・リーのうつわ」
講師：山根佳奈（当館学芸員）
8月22日（土）14:00より（13:30開場予定）／11階講堂にて／先着150名

■ 中学生のためのギャラリークルーズ'15（終了しました）
7月24日（金）、25日（土）／10:00～15:00／随時受付／展示室にて

■ 特別企画「美術館で縁日気分!!」（終了しました）
8月16日（日）13:00～17:00／1階さや堂ホールにて

開館20周年記念　没後20年 ルーシー・リー展

2015年7月7日（火）▷8月30日（日）
［休館日］　8月3日(月)
［観覧料］　一般1000円（800円）　大学生700円（500円）
※ 小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※( ) 内は前売券、団体20名以上、および千葉市内在住65歳以の方の料金
※ 千葉市美術館ミュージアムショップ［6月28日まで］、ローソンチケット［Lコード：33607］、セブンイレブン［セブンチケット］、
千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口［8月30日まで］にて販売。

同時開催　所蔵作品展　辰野登恵子がいた時代

2015年7月7日（火）▷8月30日（日）
［休館日］　8月3日(月)
［観覧料］　一般200円（160円）　大学生150円（120円）
※（　）内は団体30名以上
※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※同時開催「没後20年 ルーシー・リー展」をご観覧の方は無料

所蔵作品展

辰野登恵子がいた時代

2015年7月7日（火）－8月30日（日）

辰野登恵子《Work 89-P-13》
1989年 千葉市美術館蔵

辰野登恵子氏と最後にお会いした日にちについて確認したところ、2002年4月22日だった。東京国立博物館で開催された雪舟展の内覧会で、表慶館の前あたりで並んでいて声を掛けられた。辰野氏はもう観了って帰る途中だった。

その時は立ち話で終わった。内容は、雪舟とは何の関係もない。1993年頃に辰野氏が取り組んでいた立体作品（現在個人蔵）についてだった。それは《UNTITLED 94-4》（1994年 個人蔵）などの作品に見られる、葡萄の房が膨れあがったようなかたちで、高さが150センチメートルとだいぶ大きかった。使用していた素材は、合成樹脂なのか蜜蝋だったのか、といった話題だったように記憶している（念のためご存知の方におたずねしたところ、蜜蝋と石膏を使用していたという）。1970年代初頭からずっと平面に取り組んでいた辰野氏がなぜ立体を作ったか、それについては今後他の方たちによって詳細な研究が行われるだろうからそちらに譲ることとして、ここでは今回気がついたことを記したい。

＊

1970年代後半から油彩画に取り組んだ辰野登恵子氏はいくつかの展開を経て、80年に《WORK80-P-18》（千葉市美術館蔵）に見られる、油彩の筆あとが積み重なった画面を作り出した。軽やかさとは無縁だけれども、かといって鈍重には感じられない画面で、これは用いられている緑やオレンジ系統の色のおかげか（辰野氏の作品に見られる色は、堂本尚郎氏のそれと共通する点があると思うが、どうだろう）。筆の動きやしたたりによっておのずと画面の上下は定まっている。何を描きたかったのか。それは油彩という物質によって作り上げられた現実とは異なる空間であって、それは「描く」というよりも「作る」と形容した方がよい。

同じ時期の《WORK80-P-19》（個人蔵）では画面向かって左に、重層化した油彩のひろがりとはまったく異なる縦長のS字が見られる。この縦長のS字は、辰野氏が作った空間を開けるいわば鍵のような役目を果たしている。だからS字は、1974年に制作された版画作品《UNTITLED-26》（千葉市美術館蔵）の画面いっぱいに引かれた方眼の変容と見なすことができる。今回展示されている《WORK81-P-23》（個人蔵）では何本かのS字によって大きなV字が描かれているが、その間から、おぼろげなかたちとも、「絵の奥」とも見ることが出来る青い存在が現れている。

その後、このS字と似たような機能を帯びた要素は1980年代後半になると正方形のブロックに見ることができる。典型的な作例として複数のブロックが紡錘形をつくっている《WORK89-P-13》（千葉市美術館蔵　挿図）がある。1990年代に入るとこのブロックはまるで角砂糖のように溶け、囲んでいたはずの存在と一体化し、画面の中に陰影を帯びた「かたち」が浮かび上がっている。

では、辰野氏の絵画の展開は「かたち」を描くことが目的だったのか。そうではない。氏はその最晩年に開催した展覧会で、むしろそのような存在が生まれる空間を描く（作る）ことがみずからのメイン・テーマであると語っている。つまりこれは、ミハイル・バフチン（1895-1975）がドストエフスキーの小説のなかに小説家から独立した登場人物を見出したことと同じように、描かれている「かたち」はカンバスを前にした画家本人にもはじめは明瞭なものとして感得されていないことを裏付けている。画家のイメージが投影された「かたち」ではなく、絵画の空間ができあがる中からおのずと立ち上がってくるものとも言い得る。

「かたち」は結果に過ぎない。本稿のはじめに記した氏の立体は、自分の絵画制作の中で目撃したものは何だったのかをより確かめようとした作業の一環だったとは考えられないか。

＊

高村光太郎は1940年、日本の油彩画の性格について、次のように記している。「…日本に油絵は輸入されたが、油絵の伝統とその背後にある歴代の作品の累積とはまるで度外視されてゐた」、「…油絵を習ふ者は何故油絵といふものが存在するのか、油絵がどうして斯ういふ方法で描かれるのかなどといふ疑問や反省などを抱くまでの知性を持ち得なかつた」（「素材と造型」）。

これほど端的でみごとな分析を、高村は自らの家業である彫刻に対しては行っていない。それはともかくとして、彼が指摘していた事情は1945年以降も変わっていなかった。60年代、前衛の季節が過ぎてからカンバスに向かった画家は、高村が指摘したこのような事態にも向き合わなければならなかったはずで、辰野氏はその中でみずからの絵画を制作していた。

［学芸課長代理　藁科英也］

関連イベント　＊終了しました

■市民美術講座「辰野登恵子　かたちの生成」
【講師】藁科英也（当館学芸課長代理）
7月18日（土）14：00／11階講堂にて

開館二十周年記念展

唐画もん

―武禅に閻苑、若冲も

初めて会う人と話していると、「出身地はどこ？」と聞かれることがしばしばあります。

各地を新幹線や空路が結び、テレビやインターネットが普及した時代に生きる私たちは、行き来が自由になったぶん、色々な面で均質化している―といわれますが、なかなかどうして、現代でも、生まれ育った土地の環境―海沿いであるのか、山あいなのか、都会なのか田舎なのか―や、その土地の言葉は、そこで育つ人の性質に大きく影響することを、誰もが経験的に知っているからこそ、このような質問が出るのかもしれません。

「唐画もん」は、江戸時代中期の大坂で活躍した絵師、墨江武禅(1734-1806)と林閻苑(生没年不詳、1770-80年頃活動)、二人の画業に光を当てた展覧会です。

まず、「唐画もん」というタイトルの話から。日本の美術は古くから常に中国からの影響を受け続けながら発展してきました。「唐」という字は中国、広義には外国を意味します。そのため「唐画」、すなわち中国の絵、もしくは中国風の絵という言葉自体の持つ意味も、その時の人々が認識していた中国のイメージをまとうため、時代ごとに変わっていきます。

武禅や閻苑が活躍していた18世紀、日本では南蘋派の絵画が流行します。享保16(1731)年に来日した清の画家、沈南蘋が伝えた濃厚な色彩と緻密な描き込みによる、華麗な花鳥画の世界は長崎から上方、さらに江戸にまで波及した「唐画」であったといえます。また、画人たちは中国から舶載された画の手引書や、明末清初の中国画を見て盛んに学習しました。多様な中国画摂取のかたちがあったこの時代、「唐画」はそれらを包括した「中国的な」イメージであったのです。本展覧会では、未だ見ぬ中国に憧れ唐画を描いた人たちを、親しみを込めて「唐画もん」と名付けました。

今回の展覧会でとりあげた武禅と閻苑は、現在でこそ知る人ぞ知る存在ですが、確かなテクニックと個性的な画風で人気を博していたようです。今回の展覧会は大阪歴史博物館の岩佐伸一氏のご研究の成果に多くを依るものですが、氏のご尽力で武禅、閻苑各50点もの作品が集まり、その知られざる画業を見渡すことが可能になりました。

(図1)

墨江武禅の《山水図》(部分)(関西大学図書館蔵　図1)を見ましょう。楼閣のたたずまいや、中に立つ人の装束から、中国の風景を描いたものと分かります。山間に立つ庵、水流をゆく漁師を見つめる高士を描くこの絵は、山水画の基本的な道具立てを使っていますが、高士のいる楼閣のひとつ下の階にともる赤い灯が目を引く作品です。

闇の中の光をどのように表現するか―江戸時代の画人たちの多くは、森狙仙《月下猿図》(千葉市美術館蔵　図2)のように、画面に月を配することで、夜であることを表します。しかし武禅は、光への関心が強かったのでしょう、目で見た印象に近い感覚で、山水図の中に光をほんのり赤く描き込みました。また、《花鳥図》(部分)(個人蔵　図3)は輪郭線を用いない油彩画のようなタッチで、フラミンゴや七面鳥などを描くものです。「唐画」はこのような洋風画に対しても使われていたようで、武禅の好奇心と、旺盛な摂取の様子をよく示しています。

(図2)

林閻苑の《芭蕉九官鳥図》(個人蔵　図4)に描かれる芭蕉は中国原産、九官鳥も当時は舶載の珍鳥ですが、まずその鮮やかな色彩のコントラストに、当時の人は異国の風を感じたことでしょう。足元には孔の多くあいた太湖石や福寿草といった中国由来の吉祥モチーフを配置したうえで、落款は金泥で付しています。閻苑はこのように濃厚華麗な花鳥画を得意としていますが、一方で《蹴鞠図》(個人蔵　図5)のように、のびやかで奔放な墨線による表現も彼の作品の大きな魅力です。

(図3)

(図4)

武禅と閻苑、二人の大坂の絵師の作品に共通して感じられることは、中国文化への強い憧れと、新奇なものや表現に対する生き生きとした好奇心の発露ではないかと思っています。武禅が師とした月岡雪鼎は肉筆の美人画を得意とした絵師で、彼の画風を継承する弟子も多く育てました。閻苑が師事した福原五岳は池大雅に画を習い、大坂に大雅風を広めた人物です。しかし、彼らの弟子である武禅・閻苑は師の画風を継承するだけにとどまらず、和漢の名画を盛んに学習し、独自の表現に到っています。本展では、他にも蛙マニアの表具師松本奉時や、文人画の岡田米山人、また、彼ら大坂の「唐画もん」の活躍の場となる豊かな文化的土壌を支えた知の巨人、木村兼葭堂らの作品もあわせてご紹介します。

冒頭でちらりと触れた出身地の話、人がつくるものですから、少なからず画にもあてはまるのではないか―と思うことがあります。本展をご覧になった皆さんは、大坂出身(？)の絵画に、どのようなイメージをもたれるでしょうか。

私が感じたのは活発さや明るさ、みずみずしい好奇心、新しいものを楽しむ気持ち、そしてそれぞれの強い個性を

(図5)

ゆるす自由な気風です。自分の持っている、現代の「大阪人」に対するイメージとあまり変わらないことに嬉しい驚きを感じました。

最後に、サブタイトルに入っている「若冲も」の由縁のお話も。伊藤若冲(1716-1800)が武禅・閲苑と同時期に京都で活躍した絵師であることは、ご存じの方も多いでしょう。池大雅や曾我蕭白のように長い旅の中で制作することはなかった彼ですが、生涯に少なくとも二度、大坂に滞在したことが分かっています。版画の傑作《乗興舟》は、淀川下りの体験をもとにしたものですし、天明の大火で京都の居宅を焼け出された後には、大坂・西福寺に滞在し、晩年の大作《仙人掌群鶏図襖》(※本展には出品されません)を描きました。中国画を千枚写したという若冲も、唐画もんの代表格といえますが、大坂にゆかりも深い同時代画家の筆頭として本展の仲間に加わりました。

上方画壇のみにスポットをあてた本展は、関東では珍しい試みです。前後期あわせ150点の作品で、大坂からのパワフルな風を感じて下さい。

[学芸員　松岡まり江]

※本文中での表記について：
江戸時代以前の事例・文脈で用いるときは「大坂」、近代以降は「大阪」と表記しています。

※挿図の制作年は図2が寛政10(1798)年、他は全て江戸時代(18世紀)です。

関連イベント

■記念講演会
「近世大坂の絵画と唐画もん」
講師：岩佐伸一(大阪歴史博物館学芸員)
9月27日(日)14:00より(13:30開場予定)／11階講堂にて／聴講無料／先着150名(当日12:00より11階にて整理券配布)
■ワークショップ(※往復ハガキによる申込制)
「水墨画に挑戦！」
若冲が用いた水墨画の技法、筋目描きを体験します。
講師：住吉花間(水墨画家)
9月23日(水・祝)14:00より／11階講堂にて／参加無料／定員20名(9月14日必着／詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください)
■落語会
「上方落語で大坂気分!!」
出演：鈴々舎八ゑ馬(落語家)
10月10日(土)14:00より(13:30開場予定)／11階講堂にて／観覧無料／先着150名(当日12:00より11階にて整理券配布)

開館20周年記念展　唐画もん—武禅に閲苑、若冲も

2015年9月8日(火)▷10月18日(日)
会期中展示替えを行います。
前期：9月8日(火)–9月27日(日)　後期：9月29日(火)–10月18日(日)
[休館日]　9月28日(月)、10月5日(月)
[観覧料]　一般 1000(800)円、大学生 700(560)円
※(　)内は前売券、団体20名以上、市内在住65歳以上の方の料金
※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※前売券はミュージアムショップ(8月30日まで)、ローソンチケット[Lコード：35233]、セブンイレブン[セブンチケット]および、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(10月17日まで)にて販売
※10月18日(日)は「市民の日」につき観覧無料
〔巡回展情報〕大阪歴史博物館(2015年10月31日～12月13日)

所蔵作品展

田中一村と東山魁夷
—千葉ゆかりの画家たち、それぞれの道—

田中一村《椿図屏風》昭和6(1931)年

千葉市千葉寺町に1938(昭和13)年から58(同33)年までを過ごした田中一村(1908-77)と、戦後を長きにわたり千葉県市川市で暮らした東山魁夷(1908-99)。ふたりはともに千葉ゆかりの日本画家であり、実は、1926(大正15)年に東京美術学校日本画科に入学した同期生でもありました。企画展「唐画もん」と同時開催となる本展は、一昨年度に収集いたしました田中一村《椿図屏風》と、昨年度ご寄託いただきました東山魁夷の三部作—《自然の形象 雪の谷間》《同 秋の山》《同 早春の麦畑》を核に、千葉ゆかりの画家たちの作品を集めて構成いたします。

《椿図屏風》は、一村にあっては数少ない屏風の新出作品。その作風が最初の転機を迎えたとされる「昭和6年」の年記があり、この点でも誠に貴重です。縁からこぼれんばかりに咲き誇る椿花の群がりが、また鮮やかな赤や緑と白の響き合いが印象的です。光や色彩のニュアンスをむしろ飛ばし、少ない色数で画面を埋め尽くそうとする手法は、一村ならではといえるでしょう。一方、山梨の風景に取材する魁夷の三部作は、いまだ模索期にあたる1941(昭和16)年の作。写生に基づきながらも曲線と直線を多用したリズミカルな構成を有し、画家が観察の果てに簡潔で詩情豊かな造形に至る過程を示す重要な作例です。

はじめに同期生と書きましたが、一村は入学してすぐに美校を退学していて、ふたりの人生はわずかに交差しただけでした。一村は奄美の地で新たな作風を拓くも無名のまま生涯を終え、魁夷は静謐で抒情的な造形が高く評価されて国民的ともいえる人気を博しましたから、その後の道は対照的ともいえるものです。画業と評価をめぐる、そうした巡り合わせの不思議にも思いをはせながらご覧いただければ、と思います。

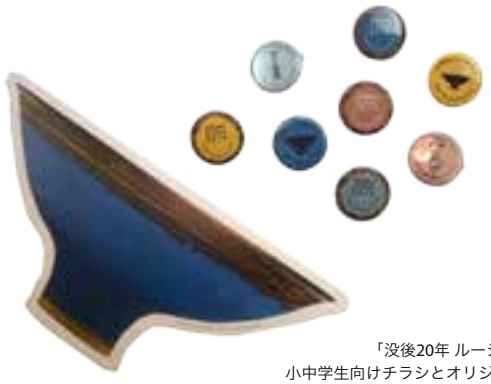
本展ではほかにも、一村が千葉の風景を描いた諸作や名品《アダンの海辺》、やはり同じ年に美校日本画科へ進み、魁夷と終生温かな友情を育んだふたり－加藤栄三(1938年から市川市に住まい、魁夷を同地に招いた人でもあります)と橋本明治の作品などもあわせて展示いたします。そして、数々の芸術家のパトロンとなり、戦後魁夷が長く寄寓したことでも知られる市川市の中村家より、魁夷と栄三の作品をお借りしてさらなる競演がかなうかもしれません。目下準備中、どうぞご期待ください。[主任学芸員　西山純子]

所蔵作品展　田中一村と東山魁夷
—千葉ゆかりの画家たち、それぞれの道—

[観覧料]　一般200円(160円)　大学生150円(120円)
※(　)内は団体30名以上
※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※同時開催「唐画もん—武禅に閲苑、若冲も」をご観覧の方は無料

今年の夏休みも中学生のための鑑賞プログラム「ギャラリークルーズ」を実施しました。ギャラリークルーズは、当館が実施している学校団体向け鑑賞プログラムの夏休み版で、個人や部活動で来館する中学生たちを対象としています。2日間で69名が参加し、ボランティアスタッフとともにルーシー・リーの作品を鑑賞しました。参加者には、オリジナル缶バッジをプレゼント。

ここ数年は、夏休みになると近隣の中学校から宿題を持った子どもたちがやってきます。きっかけは宿題でも、それぞれ気に入った作品とのすてきな出会いがあればいいですね。



「没後20年 ルーシー・リー展」
小中学生向けチラシとオリジナル缶バッジ

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、スライドを用いながら千葉市美術館のコレクションや展示の内容を分かりやすく紹介するものです。

[時間] 14：00より（開場は30分前）
[場所] 11階講堂
[定員] 先着150名（入場無料）

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

○第4回	8月22日（土）	「ルーシー・リーのうつわ」 [講 師] 山根佳奈（当館学芸員）
○第5回	9月19日（土）	「所蔵作品展『田中一村と東山魁夷』の見どころ、味わいどころ」 [講 師] 松尾知子（当館学芸係長）
○第6回	10月3日（土）	「はじめまして！大坂画壇」 [講 師] 松岡まり江（当館学芸員）

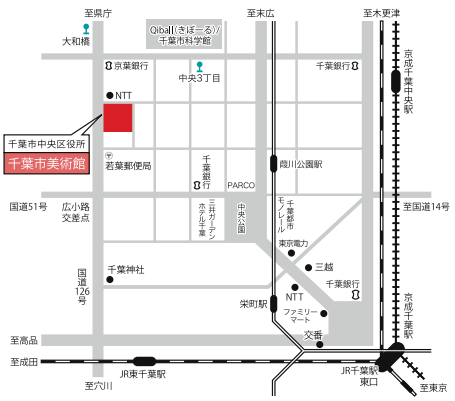
◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]
○ 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
○ 会員の同伴者（3名様まで）は、団体料金で観覧できます。
○ ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。（一部除外あり）
○ 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員（大学・専門）	ファミリー会員（ご家族4名様まで）
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。



[開館時間]
10：00 -18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
[交通案内]
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

[編集・発行]
千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
[発行日] 2015年8月20日
[印　刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art